

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：31106

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17175

研究課題名（和文）資源間関係論の構築に基づいた社会企業活動のブリコラージュ的プロセスの一考察

研究課題名（英文）A study of the bricolage process in social entrepreneurship with the focus on the inter-resource relationships

研究代表者

NGUYEN CHI-NHIA (NGUYEN, CHI NGHIA)

青森中央学院大学・経営法学部・准教授

研究者番号：80588616

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：社会的課題の解決に取り組む社会企業活動は、資源制約の中で、手元にある資源そのものを更に細分化し、複数の文脈からそれらの構成要素を再評価していくことにより、これまでの資源単位に基づけば丸ごと無価値と判断される資源の内部にも、直接的に制約の源泉とならない構成要素を見出すことができる。その構成要素を強化することにより資源を創造・強化していく。

また、制約の源泉となる構成要素を他資源の構成要素と結合させることで代替・補完するという資源間関係の形成を通じて資源制約の克服の道を切り開くことができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

資源を様々な構成要素に細分化し、構成要素を強化し、他資源の構成要素と結合させることによりその資源を強化していく理論は、資源自体の価値が認識されるプロセスを明示的に取り扱ってこなかったという既存研究の限界を補い、既存研究に対して補完的な理論、学術的意義がある。そして、資源制約状況や逆境において社会的課題の解決を目指す社会企業家活動における資源の創造、動員、強化をより効果的に促進していくための実践的含意、社会的意義もある。

これらの理論は、実際に教育現場、人間関係の構築や道徳教育において不利だと思われる状況への対応にも応用できる。

研究成果の概要（英文）： Social entrepreneurs deal with resource constraints by disaggregating further the conventionally assumed unit of analysis of a resource and re-evaluating each of its elements in various contexts. This enables social entrepreneurs to re-recognize a resource's potential and unconstrained elements that are not directly the sources of constraints. It will open up ways of creating and strengthening these elements.

Furthermore, the inter-resource relationships in which constituent elements as sources of constraints in certain resources are substituted and supplemented by constituent elements of other resources help social entrepreneurs overcome resource constraints.

研究分野：経営学

キーワード：解剖学的視点 資源単位の細分化 多様な文脈での再確認・評価 資源間関係の視点 制約の源泉とならない構成要素の強化 複数資源を横断した構成要素間の組み合わせ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

震災復興支援、貧困削減等、多くの社会企業活動は資源が制約されているなか、いろいろな工夫をしながら、創造的に社会的課題を解決していくことがみられる。資源の視点で、これらの現象がどのようにこれまでの理論のなかで行われてきたのかを見る時、資源の活用方法や資源間の組み合わせ方によって、様々なサービスを提供することができると主張する Penrose (1959) の研究をはじめ、1980年代に台頭してきた資源ベースアプローチ(Resource-based view: 以下、RBV)そして、RBVを更に発展させたダイナミックスケイパビリティ等の理論が挙げられる。しかし、これらの理論は資源制約における社会企業活動に関しては、具体的にどのように対応していけばよいのかについては十分議論されていない。その中で、企業家活動、企業家論でこれらの現象にスポットライトを当てた時に、非常に有力な視点を出しているのはブリコラージュ(bricolage)の理論である。

ブリコラージュは、資源制約のなか、「手元にある資源」だけで「新しい目的のための資源の再結合」を実現し、「やりくりすること」を通じて、問題を解決していく活動である(Baker & Nelson, 2005; Lévi-Strauss, 1962)。ブリコラージュ理論が企業家論を考える上では重要なポジションになるが、ブリコラージュ理論自体は、10年ぐらい前に、提唱されたものであり、議論としては展開され始められているところであるため、いくつかの課題がまだ残っている。特に、実際にどの根拠で「手元にある資源」の中から活用できる候補資源を抽出できるのか、既存の資源とどのように組み合わせればよいかというプロセスに目を向けた研究はそれほど多くない。

近年、社会企業活動の理論を展開する時、ブリコラージュ理論を用いて、資源が不足しているなか、いかにして創造的に様々な社会問題の解決案を作っていけるのかが論じられている。しかし、これまでの社会企業活動研究はどちらかというとこれまでのブリコラージュ理論の延長線上で理論が展開されているが、ブリコラージュ理論自体は上記で指摘したように多くの課題を抱えているため、更なる考察が必要である。

2. 研究の目的

創造的に資源制約を克服して、社会的課題の解決に取り組む社会企業活動の現象に関しては、資源ベースアプローチやダイナミックスケイパビリティ等の理論が具体的にどのように対応していけばよいのかについては十分議論されていない。本研究は、企業家活動、企業家論でこれらの現象の研究に有力な視点を出しているブリコラージュ理論に注目し、障がい者の事例研究を踏まえて、その過程を批判的に検討した上で、改訂ブリコラージュの理論と資源間関係論を構築する。構築した理論に基づいて、社会企業活動におけるブリコラージュ的な過程を考察することを目的とする。また、障がい者の自立活動だけではなく、震災被災者による社会企業活動などと比較し、社会的課題の解決に関して、より効果的な解決案の創造についての提案を目指す。

具体的に、本研究の目的は主に次の3点を明らかにすることにある。

第1は、ブリコラージュ理論の中心となる3つの要素を検討しつつ、資源の新結合の過程を考察し、ブリコラージュ理論の改訂を行う。具体的に、「やりくりすること」の過程では、企業家が既存のプラクティスや基準に関する一般的な定義を無視し、主観的に資源を定義し、その定義に伴う制約のなかで行動していくと思われるが、この論点は更なる検討に値する。「手元にある資源」が、既存の研究では、これから蓄積していくものではなく、事前に存在していることを前提にしたものではあるが、資源自体を変換させたり、強化したりすることも問題の解決につながるかに関しては疑問が残る。「資源の再結合」に関しては、Lévi-Strauss (1962: 18)はブリコラージュプロセスの中心として対話の過程を示したが、どの資源を抽出すべきなのかという論点に関する研究がまだ少ないため、更に考察するべきである。

第2は、資源間関係の理論を構築し、それに基づいてブリコラージュ的な過程、そして、社会企業活動における改訂ブリコラージュ(social bricolage)の過程を考察する。企業家論、RBVやダイナミックスケイパビリティ等の理論においては、資源制約のなか、候補資源を新たな資源の結合に抽出・活用するための判断基準がまだ不明であるため、本研究は資源間の関係性に注目し、これまでの先行研究のレビューを行いつつ、資源間関係に関する理論を構築する。資源制約への対応に関して過程論的視点で言及したのは Wernerfelt (1984)の研究である。Wernerfelt (1984)は、買収戦略を資源獲得の観点で考察すると、補足的(supplementary)な資源(同様の機能を持つ資源)か相補的(complementary)な資源(既存にある資源と効果的に組み合わせる資源)を獲得することに動機があると述べた。しかし、相補的な資源を具体的にどの場合において獲得すべきなのか、どのようにして既存の資源と効果的に組み合わせられるのかは未だ不明であるため、本研究は、事例の分析を踏まえて、その過程を考察し、資源間関係論を構築していく。

その後、構築できた資源間関係論と改訂ブリコラージュの理論を用いて、企業家論におけるブリコラージュ的な過程を考察し、また、社会企業活動の理論を展開する時、資源が不足しているなか、いかにして資源制約を克服して、創造的に様々な社会問題の解決案を作っていけるのかということ論じていく。

第3は、理論を少し違う事例・コンテキストに転換・応用する際、どういうことが起こりうるか、という分野を拡大しながら、理論上の一般化を目指す。本研究の議論は身体障がい者の事例をもとに行われているが、身体障がい者のような特有な事例の問題もあるため、他の環境・分野(震災被災者やホームレス)に理論を拡大しながら、理論上の一般化を検証してする必要がある。

3. 研究の方法

本研究は、大きく4つの段階に分けて実施した。

第1段階では、先行研究のサーベイを行い、定性的研究と理論構築の方法論を研究した上で、ベトナムと日本における障がい者による社会企業活動のケースをより詳細に調査し、分析していくことにより、プリコラージュの理論をさらに発展させた。本研究は、Stake (2006: 23)のサンプリング戦略(研究現象との関連性、文脈横断的多様性、複雑性と文脈の理解を深める機会の提供)を参考に、意図的に本研究に相応しい事例を選定した。そして、研究事例に関しては、これまで事例について書かれた二次データ(新聞など)を参考にし、二次データで得られない情報に関しては、現場見学や研究対象の取材で収集した。研究の妥当性を確保するために、マルチ・データソースを用いて、事例についての理解を深めた。

第2段階では、前半においては、資源間の関係性についての先行研究をレビューし、資源間関係論という理論を提唱した。Wernerfelt (1984)は、過程論的視点で資源間の関係性(補足的な資源と相補的な資源)について言及した。しかし、実際に資源間の相補性について詳しく述べたのはAlchian (1981)や Teece (1986)の研究であるが、これらの研究は資源制約への対応というより、むしろ資源間の関係性についての内容的な記述に過ぎない。そのため、本研究は事例の分析を踏まえて、過程的な視点で資源制約への対応に関する資源間関係論を構築した。後半は、構築できた資源間関係論と改訂プリコラージュの理論を用いて、社会企業活動のプリコラージュ的な過程を論じた。

第3段階では、ケースの比較を通じて、理論上の一般化を図った。障がい者のケースで考察された理論を震災復興や社会的課題の解決に転換・応用する際、ということが起こりそうなのか、という分野を拡大しながら、これらの理論の適用範囲を明らかにすることを通じて、理論的枠組みを構築した。研究代表者は、現在、研究活動のほかに、自ら直接的に発展途上国支援と震災復興支援のプロジェクトを推進しているため、参与観察者よりも、むしろ実践者として、フィールドや現場をよく理解している。活動現場で得られた情報、また、震災復興や社会的課題のケースでの検証結果に基づいて、理論を修正し、さらに発展させることができた。

第4段階では、研究成果の公表、社会還元と実践上の取り組みに対する助言を行った。得られた研究成果は学術誌への投稿論文や図書の刊行を通じて、研究の独創性と貢献を発信した。

4. 研究成果

(1) 資源間関係に基づく社会企業活動の考察

本研究は、資源制約の中、手元にある資源だけでやりくりし、問題解決をしていくプリコラージュ理論を、解剖学的視点と資源間関係の視点から修正した。

解剖学的視点は以下の5つのステップにまとめられる(ゲン、2019)。解剖学的視点とは、既存のRBV研究が想定する資源単位をさらに細分化することを意味する(ステップ1)。そして複数の文脈からそれら個々の構成要素を再評価・認識していくことにより、これまでの暗黙的前提や資源単位の設定レベルでは見過ごされてきた潜在的かつ有力な資源の構成要素を再認識することが可能となる(ステップ2)。さらに、これまでの資源単位に基づけば丸ごと無価値と判断される資源の内部にも、直接的に制約の源泉にならない構成要素を見出すことができる。その構成要素を強化することでその資源を強化する道を切り開くことができる(ステップ3)。

ステップ1: 資源を認識する単位の細分化

ステップ2: 多様な文脈での再評価

ステップ3: 制約の源泉とならない構成要素の強化による単独資源の強化

ステップ4: 制約の源泉となる構成要素を他資源の構成要素と結合させることで代替・補完する

ステップ5: 他のコンテキストでステップ2から流れを繰り返す。

単独資源の強化だけでは効果的に制約を克服できない場合、複数資源を横断した構成要素間の組み合わせ(一般的に言われている相互補強の実態)を形成していく(ステップ4)。本研究で提唱する資源間関係の視点とは、ある資源(既存の大きな資源単位)において制約の源泉となる構成要素の強化(ステップ3)、その要素を他資源の構成要素と結合させることで代替・補完するという資源間の動的関係(ステップ4)の考察を意味する。

社会企業活動において、社会企業家は資源の解剖学的視点と資源間関係に基づき、資源の発掘・創造・結合を通じて資源制約に対応していた。理論の妥当性を検証するため、さらに無作為に抽出した30事例で追加的に考察・検証した。これらの事例はベトナムや日本における福祉施設、教育機関、社会的企業、一般営利企業である。事業の領域も資源間の組み合わせも多様である。障がい者の事例だけではなく、復興支援事例や幼児教育現場においても、本研究が主張する解剖学的視点および人、モノ、カネや情動的資源の間の相補性(資源間関係)に基づいた組み合わせによって、資源制約の状況に対処しているという同様の結果が得られた。

例えば障がい者雇用の先進企業においても、障がい者に対し負担であるというよりも、むしろ潜在的に有用な人的資源として捉え、彼等の特技などにも注目し、既存の方法とは異なる訓練などでさらに強化することによってその人的資源を業務に有効活用することができた。ある青果店では、法的定義に基づけば就労不能と思われる障がい者も、実は健常者よりも目が良く丁寧であるため、虫が入っている野菜や腐食した部分を見つけることは一般の健常者よりも優れて

おり、その能力が訓練を通じてさらに強化され、今では青果店の価値ある戦力となっている。

日本のE氏は、これまで発展途上国支援、震災被災者支援や地域活性化の様々な活動を仕掛けてきたが、一般的に考えられているような活動資金や人的資源の不足が致命的な問題ではないと考えている。それぞれの活動を進めていく中、E氏は、熱意や社会問題に対する理解を有する外部者とのネットワークを活用し、描いた目的を共有し、活動賛同者と一緒に個々の制約を補い合い、創造的に解決策を共創している。

(2) 社会企業活動の領域を超えて

資源の解剖学的視点や資源間関係の理論は、教育現場、人間関係の構築や道德教育において不利だと思われる制約や逆境の中でやりくりしていく創意工夫活動に実際に応用できると本研究は主張したい。

様々な現場における問題解決者の共通点は、「価値」「能力」「環境」といった3つの要素のバランスで形成される活動範囲を切り開き、拡張させていくことである。その活動範囲の形成・拡張の中で、問題解決者は最上位の複数の価値を達成できるよう自らの強みを発掘し、最大限に活用していくと同時に自らの弱みを最小限に緩和していく。また、そのための環境を創造していく。

例えば、様々な個性のある学生を通常の教授法に無理やりあてはめさせるのではなく、解剖学的視点に基づき、彼等の細分化された特徴を理解した上で、それぞれの学生の弱点を克服すると同時に強みを発揮させることができる教授法、教育イノベーションを創造していくことが大切である。また、人間関係や道德教育においても、その人の弱点に対する差別や偏見がないよう弱点を緩和し、強みになる特徴を発掘していくことの意義についても助言した。

本研究の成果を子どもから大人までの様々な年代に分かりやすく発信するために、「冬はあたたかい」(こころの種に栄養を～雪国物語シリーズ)を刊行し、様々な図書館、教育機関や社会活動団体に寄贈した。

<参考文献>

- グエン・チ・ギア (2019) . 「資源制約への対応：ブリコラージュ理論の再検討と修正」『組織科学』53(1), 37-52.
- Alchian, A. A. (1981). Property Rights, Specialization and the Firm. UCLA Economics Working Papers 225, UCLA Department of Economics.
- Baker, T., & Nelson, R. (2005). Creating something out of nothing: resource construction through entrepreneurial bricolage. *Administrative Science Quarterly*, 50, 329-366.
- Lévi-Strauss, C. (1962). *The Savage Mind* University of Chicago Press.
- Penrose, E. (1959). *The theory of the growth of the firm* (4 ed.): Oxford University Press.
- Stake, R. E. (2005). *Multiple Case study analysis*. New York: The Guilford Press.
- Teece, D. J. (1986). Profiting from technological innovation: Implications for integration, collaboration, licensing and public policy. *Research Policy*, 15, 285-305.
- Wernerfelt, B. (1984). A resource-based view of the firm. *Strategic Management Journal*, 5 (2), 171-180.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|----------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 Nguyen Chi Nghia | 4. 巻 53-1 |
| 2. 論文標題 資源制約への対応：プリコラージュ理論の再検討と修正 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 組織科学 | 6. 最初と最後の頁 37-52 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|------------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 Nguyen Chi Nghia | 4. 巻 77-1 |
| 2. 論文標題 資源分析の単位設定の再考：資源の解剖学的探検の試みを通じて | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 東北大学経済学会研究年報『経済学』 | 6. 最初と最後の頁 71-85 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--------------------------------------------------------|------------------------|
| 1. 著者名 Nguyen Chi Nghia | 4. 巻 第 87 集 |
| 2. 論文標題 社会企業活動における機会の認知に関する考察 - 社会的課題の当事者の視点に着目して ~ | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 経営学論集 | 6. 最初と最後の頁 (58) 1-2 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

| |
|--------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Nguyen Chi Nghia |
| 2. 発表標題 社会企業活動における機会の認知に関する考察 - 社会的課題の当事者の視点に着目して ~ |
| 3. 学会等名 日本経営学会第90回大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|----------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 ゲン・チ・ギア | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 ものの芽舎 | 5. 総ページ数 80 |
| 3. 書名 「冬はあたたかい」(こころの種に栄養を～雪国物語シリーズ) | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|